

## 広瀬 紼 の 研 究 (第3報)

藤 原 モ ト ヨ

### I 緒 論

第1報で述べたように、<sup>1)</sup>紼織りは東洋の産物で、西洋には全くなかった。その発生地は太平洋の南の島々で、ニューギニアのあたりといわれており、一現在でもその手法が伝えられて生産されているという—これが島から島へと伝わり、さらに北上して、琉球、中国大陸と発達しながらひろがっていった。中国大陸へその手法がはいったのは、かなり古く、そこでは錦の名で織られた。錦にもいろいろな手法があったが、その代表的なものは、綴れや、縦横の糸が浮きだして美しい模様を織りだしたものの一俗に太子間道といわれて名物裂の一つに数えられている裂錦のように一や、法隆寺に伝わっている広東錦<sup>かんとう</sup>などで、これらをみるとその手法のすばらしさをよく理解することができる。なかでも広東錦は、広東方面から和同4年元明天皇の御代に渡来したものといわれ、黄、赤、茶、緑等の美しい縦紼で、横は無地に織られ、現在の南方の紼の図柄がこれと非常によく似ている。南方の紼は、いわゆる縦紼であったが、琉球にはいつてからは、横紼もはじめられるようになっていく。これらの錦の手法が、日本にはいつてきたのは、天平時代以後のことで、仏教文化の伝来とともに、縫衣工女、兄媛、弟媛、呉織、穴織などが来朝して、その技法を伝えた。その後、大和を中心にして技術の普及がはかられたが、その錦のなかには、当然、紼の手法の広東裂のものもあったと思われる。

さらにまた、因幡、伯耆、出雲には、奈良時代に錦綾の専門家である織部司に属した挑文師が、全国に派遣されて、その技術を伝えたことが記されているから、縦紼の手法も、このときいっしょにはいつてきたと思われる。しかし、この手法はみるべき発達をとげないで終わったらしく、現在この三地方に織られている紼は、これら古代の手法の伝統をひくものではなくて、新らしく徳川時代に流入したものといわれている。徳川時代以前の織物は、紼ではなく、無地に織って染色によって文様をつけたものがほとんどであった。その後徳川初期になって縞が織られるようになり、ついで中期にはいつてはじめて紼の手法がはじめられるようになった。縞は紼に近く、無地について手法も簡単であるから、もっと古くから発達してもよいと思われるのに、これが日本で織られだしたのはかなりおそく、慶長年間に織物に筋のたったものが渡来してのちであった。当時日本では遠いところを「島」とよんでいたのも、このインド南蛮渡来の「島物」を「奥島」とよび、また、浅留島<sup>さん</sup>という縞は、セント・トーマス渡りのなまりなどといわれている。この島はのちに「縞」と書かれるようになった。

縞物が一般庶民のものとして、さかんに使われたのは、徳川中期の天和法度<sup>はつと</sup>によってであった。すなわち、華美<sup>しゃし</sup>、奢侈を禁じられたため、染色のはでな着物が着られなくなり、質素にかなう縞が流行して、そのため丹波や出雲地方によい縞物が織られ、丹波布、出雲布として有名となった。また、縞のことを別名間道ともいって、青木間道、弥兵衛間道、海老殻間道<sup>えびがら</sup>、吉野間道、鎌倉間道などと図柄や布地によって、種々によんでいる。

紼は、縞よりもさらにおくれて、おりはじめられた。前出のように、奈良朝の錦の技術はその後ほとんど伝わらないでおり、あらたに徳川の中期(14世紀—15世紀)以後に、南方からふたたび紼の手法は伝えられてきたと思われる。南方で発生したその手法は、まず琉球にはいつてそこですばらしい進歩をとげて、九州地方へ渡り、瀬戸内海のあちこちで織られて、その後山陰へと伝えられてきたのである。

南方の縦紼が、琉球にはいったのは、今から600年位前といわれるが、そこでは、さらに横紼も織られるようになって、紼が一段と美しくなった。しかし、この琉球の紼の手法は広瀬紼や浜紼のそれとは異ったもので、手法としては簡単な「手結<sup>てゆい</sup>」というのであった。これが日本に渡って、さらにもう一步進んだ手法となり、種々の柄が織られるようになった。そして、出雲、倉吉、弓が浜地方に伝わるころには、紼で絵模様を織る高級な技術にまで進んできている。

つぎに染め色をみると、南方の紼は、広東錦のように色物が多く、茶色なども多く使われている。また琉球でも紺色ばかりでなく、黄色の地や白地のものなどもあったし、同じ紺色でも日本のものと異って、黒味が深く、南国の強い日光と風景に、よく調和したであろうと思われる。この色は本土で多く使用している「蓼藍<sup>たでい</sup>」ではなく、「山藍<sup>1)</sup>」を用いているからであろう。しかし、同じ「蓼藍」でそめても、九州地方や山陽地方の藍色と、山陰地方の藍色とでは、これも少し違うようである。山陰のものは赤味をおび、紺色にあたたかさが感じられる。冬の長い山陰の紺紼は、このあたたかい感じがなんともいえず美しいものである。これは同じ蓼科のものをを用いても、染めるときの気候の差が、染め上げの色調に微妙な相違をもたらすのではないかと思う。

また、琉球で栄えた紼には、幾何学的な図柄のものが非常に多かった。が、この美しい模様は農民たちの汗の結晶であった。日本でも奈良、平安時代に調布として税金のように布をおさめさせられたこともあったが、琉球ではさらにきびしく、農民たちは、年にいくらかきめられただけの紼を織らなければ、生活ができなかった。その布は尚家<sup>しょう</sup>という王宮で使用され、また、日本や中国<sup>みつぎ</sup>への貢物として使われた。小さな島ばかりの国であったから、中国や日本の属国となり、また現在では、アメリカの統治下にあつて、苦しい歴史の歩みをつづけながら、農民は強制的に織りの仕事をさせられてきた。しかし、そのみじめな生活のなかで、織りあげられた紼には、美しくないものが、一点もないということに、驚異のまなこをみはらずにはおられない。

さらに、琉球の紼を発展させたものの一つに、紼の図柄をデザインするデザイナーが王家にあつて、重要な地位にあつたことがいわれている。これは広瀬藩におかかえ絵師がいたのと同じであろう。

徳川の中期以後九州へ渡った琉球の手法は大島、久留米、薩摩、伊予、備後、伊勢崎、秩父、館林、足利へと伝えられ、各地に特異な絣が育った。山陰地方には、久留米、備後などから徳川末期に伝わってきたが、それは、ほとんどが紺絣で色物はなく、紺に白い色が美しく織りだされている。この地方の絣としては、広瀬絣、倉吉絣、浜絣が同じところにはじめられたが、いずれの絣も絣織りが盛んになる以前から、その手法や模様それぞれ特徴があった。

そのなかでとくに、広瀬絣と浜絣とを比較してみると、種系の作り方、使い方、模様の傾向等が、土着綿や地藍を使用して、生活のために織られた浜絣と、城下町において、他から原料を移入し、家庭内職がしだいに副業的に発達した広瀬絣とでは、その生活的条件の相違が、絣のうえに微妙な差異をみせている。そこで前報<sup>1),2)</sup>について、浜絣の由来をたずね、広瀬絣と比較研究してみた。

## II 浜 絣 の 起 源

およそ130年位前に西伯郡車尾村で機織が盛んに行なわれ、摺染<sup>くずも</sup>の絣を織っていたのが、摺絣として社会に歓迎され、これを一名車尾絣ともいった。浜絣はこれを模倣したものといわれている。また、約150年前広瀬の城下町が大火にあい、そのとき焼けだされた織手が弓が浜に移住し、そこで織りはじめたものという説もある。この点は古老に聞いても、諸説があつてさだかではない。しかし、年代を追うてみると、広瀬絣は、文政年間に米子からその手法が伝わっているのに対し、車尾村の摺絣は、徳川末期山陰へ絣の手法がはいったはじめのころのものであるから、これがのちに浜絣となったのではないかと思われる。浜絣の産地、夜見半島は綿作、藍作で有名な地方で、原料が豊富にあり、細民といえども多少の耕作地を有し、綿作に要した日雇賃は、綿で代償する慣行があつた。絣織りのはじまところは製品は自家用にすぎなかったが、のちに浜絣としてその声価をえ、出雲、美作方面に移出するようになった。明治35年には、全県生産高9万7千反のうち浜において、6万1千反を生産して、数量的にも浜絣の優位を示している。しかし、都会には、あまり販路はひらけていなかった。

その後、明治中期以後になって、紡績工業の機械化におかれて、漸次衰滅し、大正初年から10年ころには、年間2万反程度の絣を生産するにすぎなくなった。

## III 浜 絣 の 沿 革

弓が浜の綿業発展は土着綿および浜の目藍にその基礎をおき、家内工業の自給自足より出発して、問屋制家内工業へと発達した。綿業史年表によれば、延宝4年境村小空に、備中玉島より綿を移植したと伝えられている。元禄年間には日野川流水を分流して、浜の目を北の境港まで縦断して、米川を作り、綿作に力をいれた。この川は綿作の減少した今もなお灌漑として利用されている。また、元禄2年には繰綿<sup>くり</sup>、藍玉の生産が多くなり、白木綿<sup>もめん</sup>はすでにこのころには生産され、他藩へ移出されていた。宝暦年間には米子灘<sup>れき</sup>の飛白織<sup>なだ とびしろ</sup>がはじまり、寛政年間には米子

の車尾で紋木綿の生産が盛んになり、縞木綿も文化年間に他へ移出されている。これら織物の生産形態は、すべて農家の女子の手織りであった。その後、文政8年には紺屋が自分で藍を製しだすことも許可されている。

浜紘が織りだされるようになった時代的背景は、以上のように、藩政時代の綿業の発達と製藍場の設置によるもので、紘の手法がこの地方にはいるや急速に生産量を増し、最も盛んになったのは、明治の初年であった。生産形態は家内工業（職人10人以下を使用していた）と、織元の支配による賃織りが圧倒的であったが、そのころ倉吉紘では、力織機によって織りだすようになっていた。

その後、紘は衰え、かわって養蚕が盛んになった。明治10年ごろからは、いっそう力を入れて、最盛期の明治40年には3万貫の生糸を生産し、ついで昭和2年から10年あたりまでは、生産高もぐんぐんのびて、20万貫をあげている。この養蚕業は綿作以上に総合的な労働力を要求するもので、現金収入の面からみると、綿作より以上のものを弓が浜農民にもたらし、養蚕によって土間を畳にかえることができたといういい伝えがあるくらいである。

また、藍も大正時代にほとんど衰退し、近年まで富益の紺屋が自家用に作っていたものも、全く作られなくなった。そして藍にかわって、大正10年ころから作りはじめられた野菜類は、その後次第に需要も増し、現在ではおおかたの畑地で、ブドウ、タバコ、伯州ねぎ、その他のそ菜類が栽培され、米子、境港の市場に進出している。

しかし、戦後郷土民芸が再認識され、それに伴い浜紘の郷土色豊かな美しさが認められて、米子市の和田、富益、崎津方面において紘織の技術が復活し、みやげ品として売りだされるようになった。

#### イ 綿作について

米川の流域を利用して綿作が本格的にはじまったのは、明和、安永のころといわれている。天保3年のころには非常に豊作であったが、同7～8年は凶作で種子を失い、四国から種子をえてのち、ふたたび盛んに栽培され、当時は赤綿、朝鮮綿として、優良な綿と目されていた。さらに、嘉永年間には強健で繰綿歩合の多い種子を研究し、明治3年には湿地に適して強壯な森岡綿がえられ、つづいて河崎綿、大篠津綿が品種もよく繰綿歩合もよいのでながく栽培された。

弓が浜地方の綿作はこのようにして発達し、この地方の一大産物となった。そして他国に移出するものには、鶴、亀、松、竹、梅などの等級をつけて、県内産綿の9割を占める生産をあげていた。しかし、明治6年ころ価格が下落し、反面肥料が騰貴したので収支がつぐなわず、そのうえ外国綿花の輸入と蚕業の発達によって衰退のやむなきにいたり、作付反別が激減した。が、明治43年以来、この綿花は脱脂綿および中入れ綿として、弾力性があり優良であるとして、ふたたび需要が増し、大正4年には大篠津村に綿花試験地をおいて、研究にあたった。大正元年からの3年間に、10町歩以上の栽培反別を有した村は、県下では弓が浜地方の14村であり、なかでも彦名村が一位、ついで崎津、大篠津となっていた。その後養蚕業が盛んになるにつれ

て、綿作はすたれ、今日ではほとんど統計にのるほどのものは作られなくなり、わずかに民芸用、ふとん綿用が栽培されているにすぎない。

#### ロ 藍作について

旧藩政時代米子に藍座をおき、阿波から教師をやとって、栽培、製造の方法を習得し、品質を改良して、出雲、石見地方に浜の目藍として移出していた。全県の藍作反別は明治30年には383町9反あったのが、40年には83町3反となり、大正5年には25町2反にまで減少したが、その反別の9割までが弓が浜のものであった。藩の殖産事業中、藍作については、非常に力をいれ、改良法を伝習し、廃藩置県ののちにもこの保護を怠らず、年々増収してきた。明治23年には種子を徳島県にあおぎ、県立農学校（現・県立倉吉農業高校）に藍作および藍製造のための教師をやとい、特に藍作専科をおいて指導に力をいれた。さらに各郡連合葉藍共進会を開設し、肥料の試験を行ない、改良について奨励勧誘をおこたらなかった。藍の種類は在来種の「いろよし」および阿波産の小千本—このころ阿波で栽培されていた品種は、青茎小千本、赤茎小千本、<sup>ひやつかん</sup>百貫、<sup>じょうこ</sup>上粉百貫、小上紛で、なかでも小上紛は明治34年以来普遍化した。一等である。肥料は魚肥であった。藍が衰えた後、綿作よりさきに藍作は激減し、現在では葉藍の姿はみられなくなった。

#### ハ 紺屋について

安政2年には紺屋が二種にわかれていた。すなわち、自分で床付け、育成、刈りとり、貯蔵、藍玉作りのすべてをするものと、他から藍玉を買い入れるものとであった。他から藍玉を買うものに対しては、国産藍（浜の目藍）を使用するよう藩より厳しい達しがあったといわれる。それは、浜の目藍は阿波産にくらべると色がうすいので、自製者でも阿波産を多少まぜ合わすのが例であったからで、翌3年には阿波産の藍の買い入れを許している。

紺屋が自分で藍を製することは文政8年に許されたが、それまでは紺屋は、問屋から藍玉を買い受けたり、地方から買ったりして、製藍をした。その後この地方にも葉藍がではじめたので、自分で床付けする紺屋が多くなった。これは問屋および製藍方からみれば、顧客を減ずるわけであったから、相当やかましい規定をつくって、藍瓶運上を徴収することもはじまった。文政8年の藍自分製の儀では、その名前を<sup>ろう</sup>蠟座や藍方に書きだし、規則を厳重にするよう達しがだされたと伝えられている。安政時代紺屋は全県に44軒、瓶数550を上下していたが、そのなかの33軒は弓が浜にあった。現存しているのは、和田の2軒、崎津の1軒で、作業着、家庭着、民芸品等を染めている。

#### ニ 綿布について

元禄年間に白木綿を他藩に移出していたが、当時は布の寸尺について一定の制がなく、販路もきわめてせまく、わずかな産額にすぎなかった。享和年間には、<sup>きょう</sup>因幡、伯耆の両国で、綿布の奨励をはかり、寸尺を一定して販路を京阪地方に求め、文化年代には大阪へ年間40万反の移出をするようになり、ここで伯州木綿の名声をえた。これとともに綿木綿も産額を増し、安政の末から文久年代には、販路を拡張して、綿布の移出が最も盛んとなったが、維新後、<sup>かなきん</sup>金巾織

が輸入されて、白木綿に影響をおよぼし、明治14,5年ころには移出は全くたえてしまった。ちょうどそのころ、鳥取市に機織工場がつくられ、婦女子にはたを教えて、縞木綿の製造を盛んにしたので、それにつれてふたたび需要も高まり、漸次各所に機織工場が設立されて、年産15万反をあげていた。原料の綿は多く西伯郡に産し、手挽糸<sup>びき</sup>を使用して、織質の低廉であることと、品質堅牢<sup>ろう</sup>で庶民の時服に適していることが、品物を安価にし、需要も大きくのびた。しかし、漸次大阪方面の紡績会社に綿を移出するようになって、綿布の生産はみられなくなった。

#### ホ 地 勢

山が少なく、田圃が少なく、広い畑地で、内海に接した内浜と、外海に接した外浜とでは、多少土質は異なるが、いずれも第四紀新層に属する海水沖積地で、砂土からなり、地下水は30cm～90cmのところにあって、所々に井戸を掘り、夏季の灌水用としている。荒砂地は桑園とし、細砂地で綿作や藍作をしていた。

#### ヘ 気 候

一般に外浜よりも内浜のほうが綿作に適した気温で、土質のよさとあいまって、収穫が多く、品質もよいといわれている。綿作、藍作は、芽ばえから、開花、収穫まで、風雨がなく乾燥することが大切で、対岸の島根県河川の流域からおこる風によって、品質が一層よくなるといわれていた。その意味で、浜地方は、雨量、湿度、気温、風速ともに恵まれ、綿作、藍作に適していた。

#### ト 風俗習慣

浜地方は、むかしから畑作農業を中心として、庶民的で、進取発展の気性にとみ、労働をいとわず、土地の利用をよく考えている。協同的事業にも力をいれて、生活面の切りかえについても勇気を持ち、経済生活第一に考える風潮がある。

### IV 浜 紉 の 特 徴

浜紉は土着綿を手挽糸とし、それを地藍でそめて手織りされている。模様には身近なものをとり入れたのが多く、幾何模様としては、箱だん、ありご道、風車、豆腐、そろばん、井桁の地味な着物柄があり、絵模様では花かごに梅紋、松竹梅、菊花、鶴亀、松皮菱<sup>ひし</sup>に散り宝などが、古くから織られていた。

複雑な模様の横紉をおる場合は、型紙を使用して、括<sup>く</sup>くる場所を定めてそめたが、さほどに複雑でない場合には、種糸を用いて括<sup>く</sup>くる場所をきめていた。種糸屋に紉を織るための下絵をもっていけば、どんな絵でも種糸に作ってくれたし、また、数多くの種糸の既製品があって、下絵はなくても種糸屋にゆきさえすれば、適当な模様を選ぶこともできたものである。

地藍の最高級品と阿波藍の下級品とでは、俗に八駄と一俵といわれるほどの差があったもので、一駄は二俵というから、ずいぶんな格差である。このように地藍では、あまり上質な藍はできなかったのので、阿波藍をまぜて使用し、糸は手つむぎで太いところや、細いところがあって、織りあがった紉はまことに野趣豊かであった。

## V 浜紼の製作工程

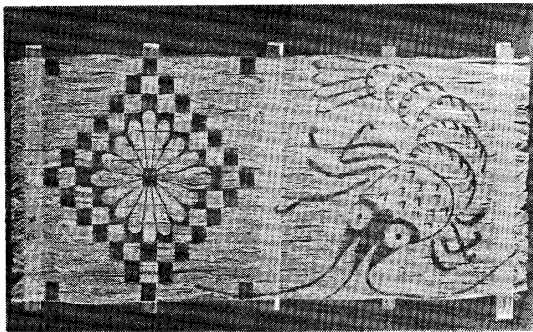
### 1. 糸ごしらえ

糸はふたこ糸、紡績糸、手挽糸等を使用し、広瀬紼と同様に糸の脂抜き<sup>1)</sup>をして、花杵<sup>かき</sup>を用いて小杵にうつすのである。

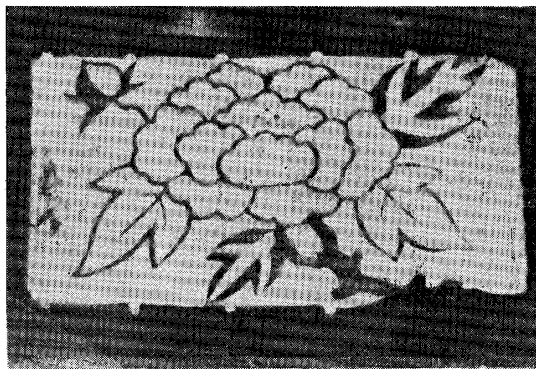
### 2. ま か せ

横紼の場合は、縦糸は縦綜台<sup>へ</sup>にかけて、織物の長さや、幅をきめ、横糸には種糸を使用する(写真①、②)。すなわち、種糸を長くのばして、横糸になる白い糸を30本これと同じ長さ

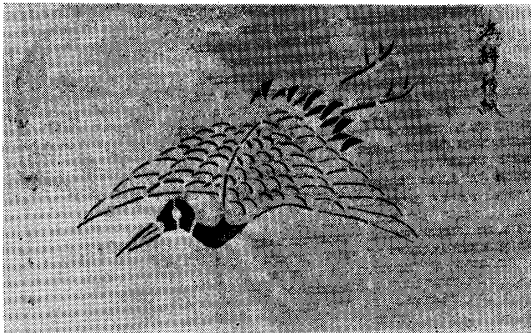
① 種 糸



② 種 糸



③ 型 紙

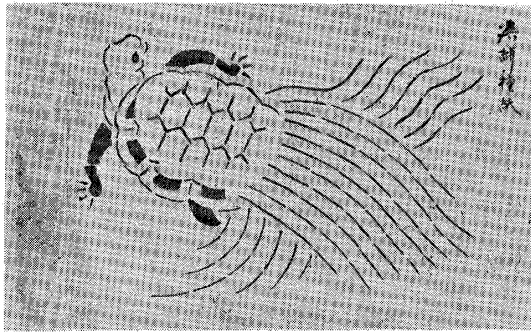


し、種糸といっしょに引張り、種糸の墨のついている印に合わせながら、あらそでくる。こうして糸を括くってしまうと、その模様がなんであるのか見当がつかなくなり、ときには結び忘れをして、織りあげてから大切なところがぬかっていることに気がつくこともある。

この種糸は、絵図台のうえで型紙を用いて作られる。型紙は、渋紙を4、5枚はり合わせたうえに、紼の模様を墨で下書きして、適当につなぎをつけながら彫り抜いて作ったものである(写真③、④)。また、絵図台は、布幅と同じ幅の箱の両端に箴<sup>おさ</sup>をうちつけたものである(第2報写真②の種台と同様のものである)。この台に横糸を箴<sup>2)</sup>にかけながら並べ、そのうえに種紙をのせてうえから墨をすりこんで種糸をつくる(写真⑤)。そして種紙をはずして、つなぎを筆でぬりつぶして仕上げをする。こうしてできた種糸は横紼だけのものであるから、縦紼をいれるときや、縦横の紼を組み合わせるときには、別に「よみ竹」をこしらえて、印をつけておく。絵模様の紼は、大縦横紼であるが、幾何模様の場合は縦横併用か、あるいは縦紼のみである。この他に種糸を使わないで長綜台を用いる場合

もある。長綜台は布幅と同じ寸法の木の小に、竹のくぎを、横糸を打ちこむ間隔に打ちつけたものである。すなわち、長綜台に横糸となる白い糸を30本かけ渡し、種紙を置き(第2報写真<sup>2)</sup>

④ 型 紙



⑤ 絵 図 台



⑤ 参照) そのうえから墨をすりこんで、紼括くりをする。この方法では括くり忘れない(第1報写真⑤、⑥と同じ)。

3. 藍染め(第1報広瀬紼の方法と同じ)

4. あく抜き (同上)

5. のりつけ (同上)

6. 織り方 (同上)

## VI 広瀬紼と浜紼の比較

弓が浜では、元禄年間から白木綿を織って他藩に移出したり、縞木綿を織っていたので、機織りの技術ははやくから普及していた。また、綿や藍も大量に栽培されたので、天和年間には浜紼として急速な発達をした。

一方広瀬では、いざり機を使用しているところから単純な横紼や織色(紺無地)を織っていた。織色はむかしから手甲、脚絆、股引、つづれの衿、野良着の裏地、ふとん裏地などに使用されていたが、紼の手法がはいってからは、縦紼や縦横紼、絵紼を織るようになったが、綿や藍は弓が浜のように大量な栽培を

していないうえに、山間の小さな城下町の副業的な仕事であるために、生産量は少なかった。しかし幕末から明治にかけては、最盛期をむかえている。

つぎに風俗習慣についてみると、むかしから今にいたるまで相いも変わらず城下町の通例で封建性が強く、華道、茶道に趣味をもち、よもやま話に花を咲かせて時間を空費する風潮の広瀬とちがい、浜地方は明るく庶民的で、労働をいとわず、進取発展の気性にとんでいた。

しかし、近年米子市周辺の農村は、近郊農村的性格をつよめ、住宅地化して、風俗習慣の面にも相当に大きな変化がもたらされた。農民が労働をいとわぬのは、主として土地利用の目的からくるもので、畑作でも種々な輪作をなし、目立った農閑期というのはなくて、労働が年間平均化している。

また弓が浜はむかしから島根県との交流や、他地方との交流が多く、農村部でありながら、いわゆるハイカラ好み(これはとくに戦後海外引揚者の帰還、米進駐軍の駐在の影響がある)の風潮があった。

広瀬紼と浜紼の模様に微妙なちがいがあるのは、以上のような土地柄の相違によるのではな



いかと思われる。浜紼の模様は非常に庶民的で、単純なものが多く、野趣豊かな美しい紼をおりだしているのに対して、広瀬紼は物語りので繊細なものが多く、どちらかといえば紼としては上品にすぎるとされるものもある。また、柄のおき方や、組み合わせ等もよく考慮されている。紼におられた亀の模様を比較してみても、全く広瀬らしく浜らしく相違していることはおもしろい。

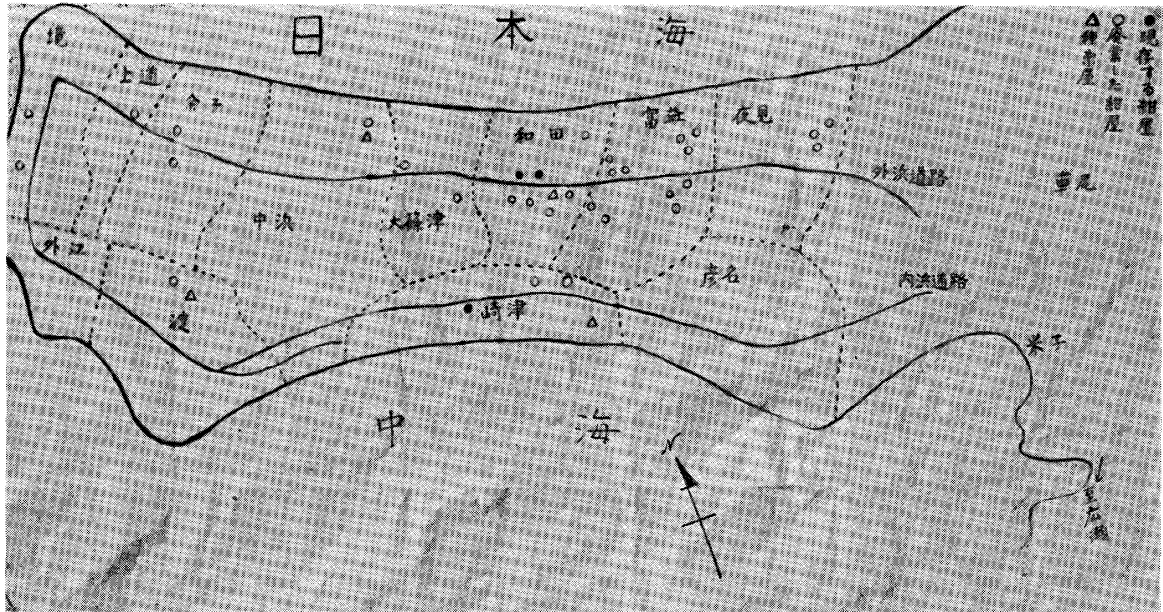
紼の手法のなかで両者が最も異っている点は、浜紼の種糸使用である。紼織りの盛んなころには、種糸屋が4軒もあった(中、渡、崎津、大篠津に各1軒ずつ)。種糸を使用すれば仕事の能率がよいので、単純な模様なら早くらくに大量生産ができたわけである。しかし、広瀬には種糸屋は1軒もなく、型紙屋があった。ここで扱かう型紙は浜紼のそれとちがひ、縦に長い型紙(第2報写真⑤扇面の型紙に同じ)を使用していた。この型紙を使用するのは、種糸を用いるよりも時間はかかるが、糸の括くり忘れがない。

つぎに紼染めの色についてみると、初期の紼になるほど染色に差がみられる。広瀬紼では地藍の不足から阿波藍を早くから使用しているので、濃紺のあざやかな色のものが多く、浜紼は地藍を大量に生産していたため、初期のころは地藍だけを用いたもので、地色の紺が浅かった。のちになって、阿波藍をまぜて使用するようになり、その後は一段と色も濃くなってきている。

紼が衰えたしたのは、機械織りの圧迫と、昭和16年の統制につづいて捺染、抜染の出現が大きく原因している。紼が衰えたのちは、広瀬では農家の副業は養蚕や木工業にかわり、紼織りは1軒の紺屋と2、3の織り手によって余喘を保っているにすぎなかった。一方弓が浜地方は、その土地柄から畑作を中心として、つねに新しい農業経営や、新しい農作物の導入を考えなければ、生活できなかつた事情もあつて、綿、紼、桑、野菜、養鶏、養豚等を仕事とし、最近では野菜、果樹(みかん、ぶどうなど)、タバコの栽培が大きな生活のささえとなっている。また戦後小作地が解放され、農業の兼業化、サラリーマン化が進んでからは、さらに生活の切りかえが目立ってきた。

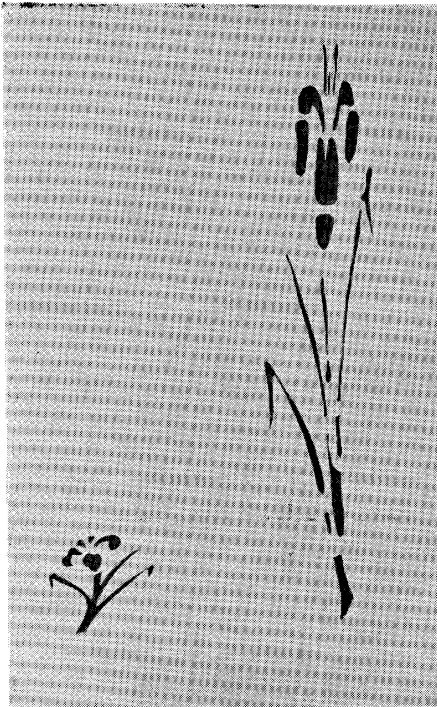
以上のように弓が浜は、生産意欲がおう盛で、紼が衰えたのちも土地利用をよく考えて、生産にはげんでいる。しかも昨今の民芸ブームにのり、現在残っている軒の紺屋とわずかな織り手たちが、広瀬紼とならんで浜紼の生産に力をいれはじめた。

⑥ 弓ガ浜の紉屋，種糸屋の配置図

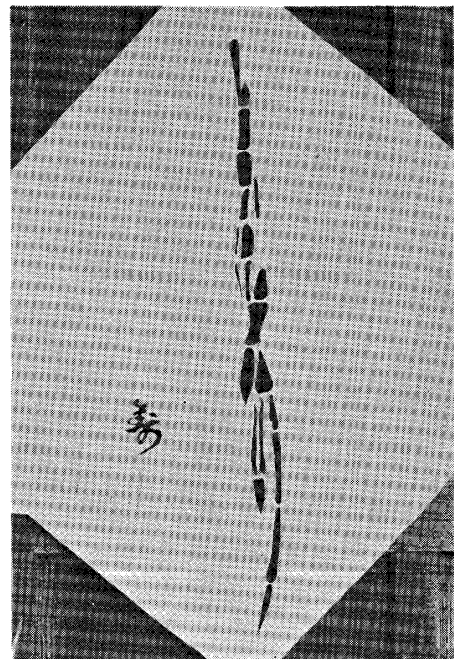


縦に長い型紙と織り上った模様

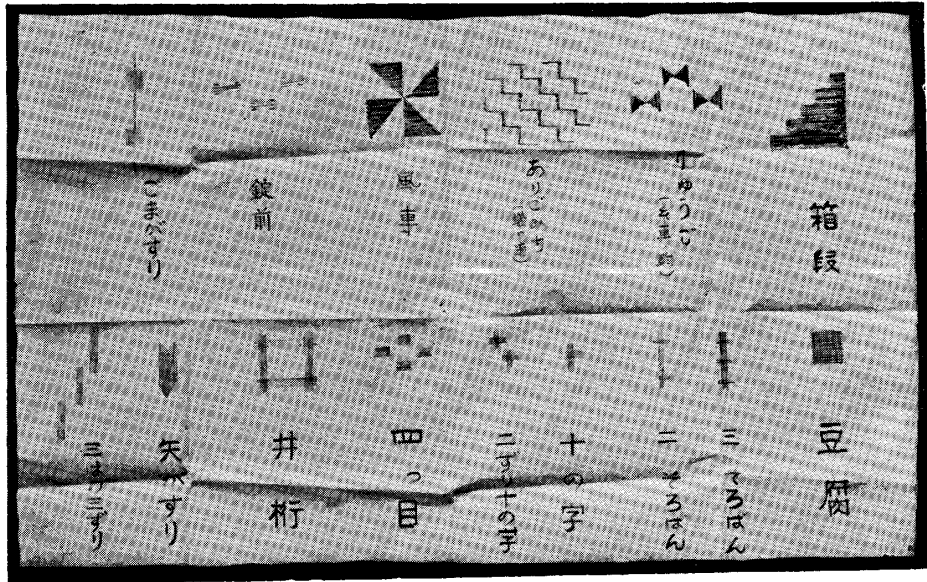
⑦



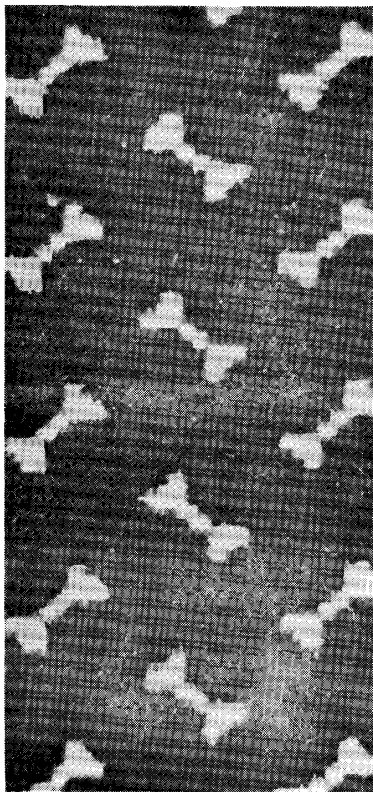
⑧



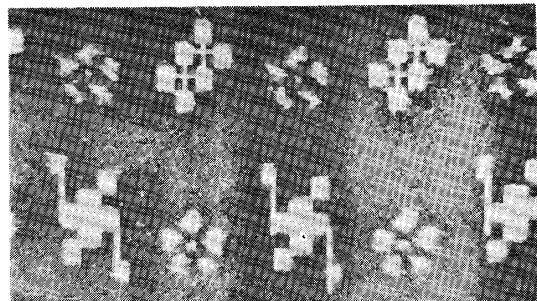
⑨ 浜紉柄の基本



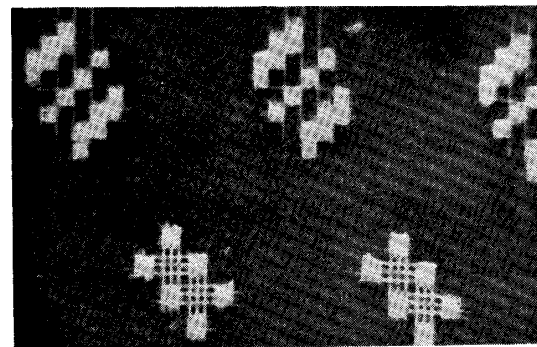
⑩ こつづみ



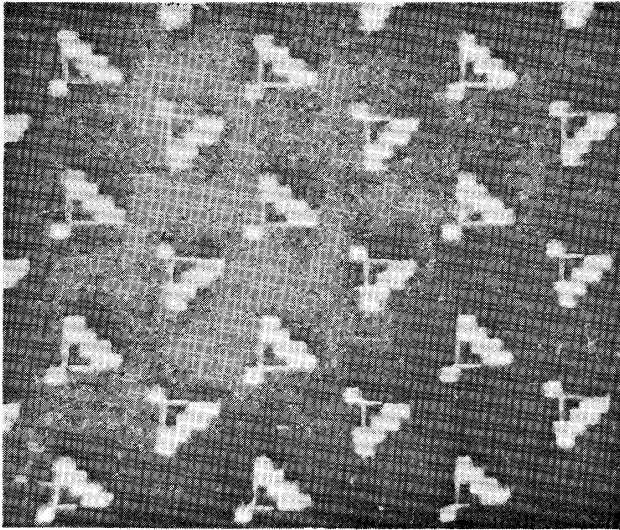
⑪ 十字豆腐に花文



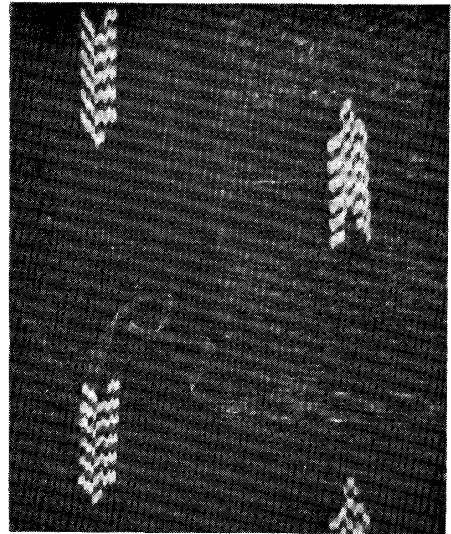
⑫



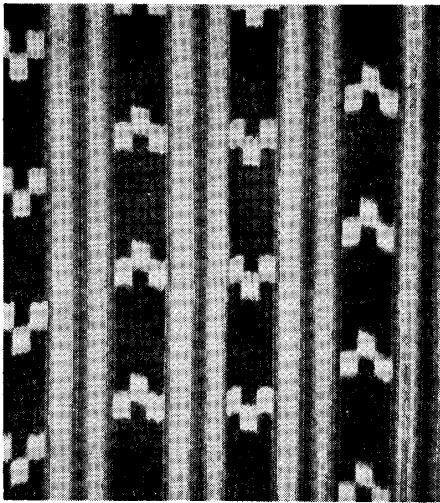
⑬ 小 扇



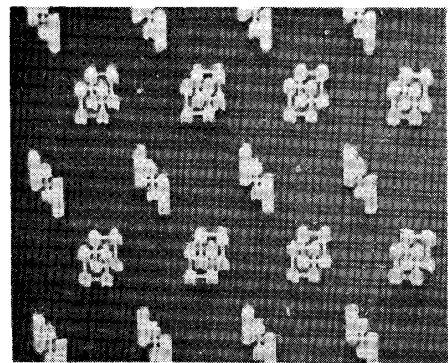
⑮ 矢 紬



⑭ 縞にずらし紬

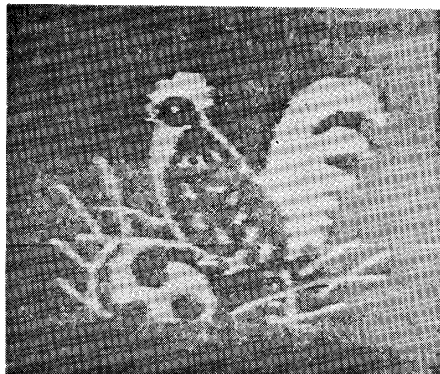


⑯ 幾何文

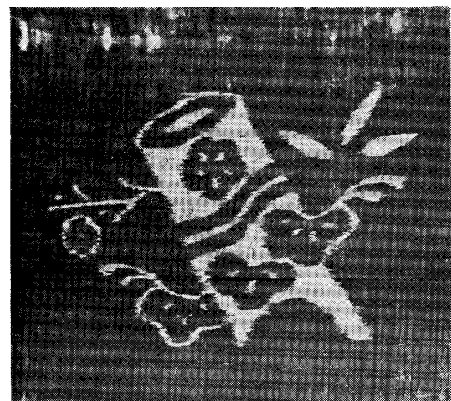


浜 紬 の 絵 模 様

⑰ にわとり



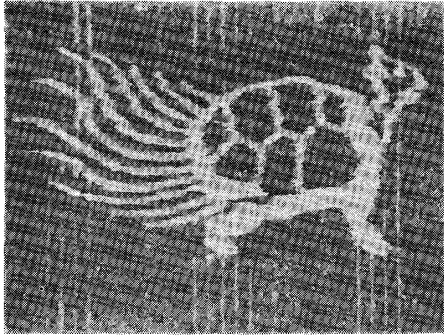
⑱ 竹に松竹梅



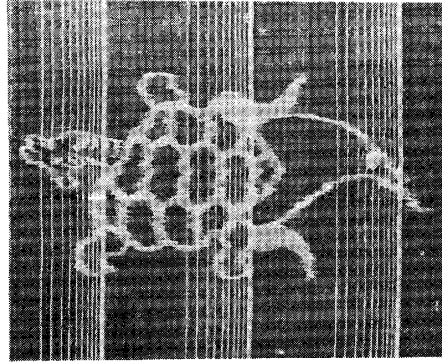


広瀬 紼 と 浜 紼 の 模 様 の 比 較

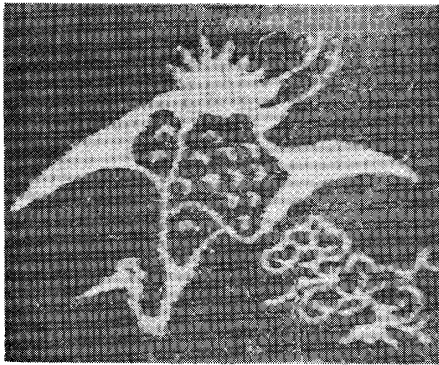
①⑨ 広瀬 紼 (亀)



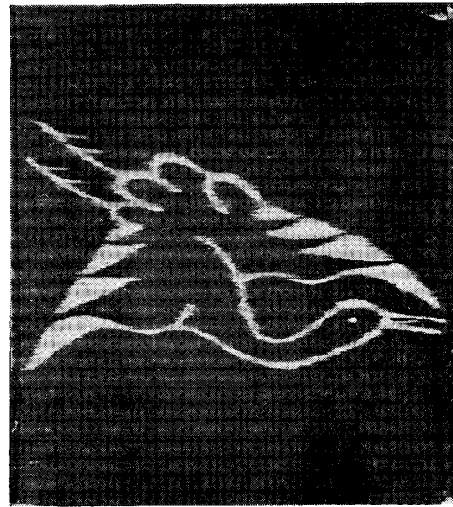
②⑩ 浜 紼 (亀)



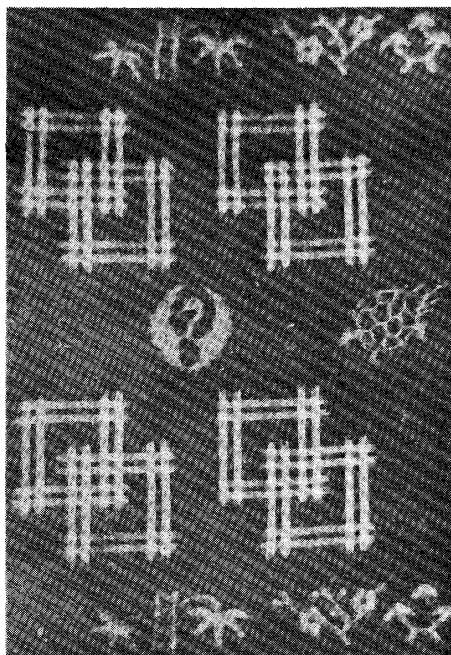
②⑪ 広瀬 紼 (松に鶴)



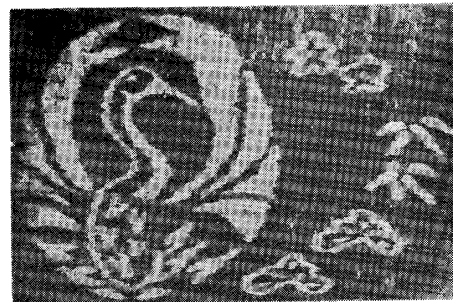
②⑫ 浜 紼 (鶴)



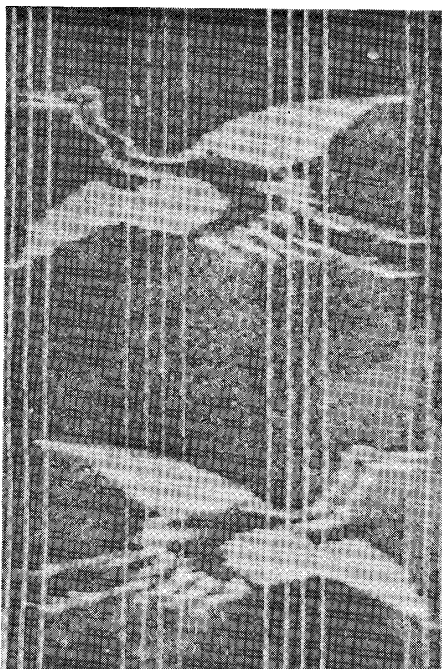
②⑬ 浜 紼 (松竹梅)



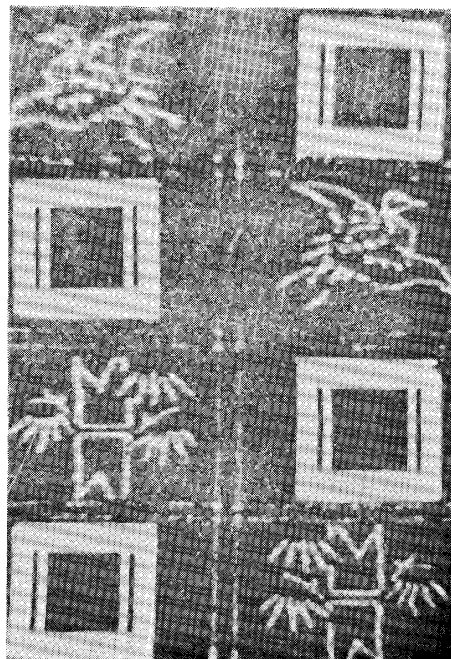
②⑭ 広瀬 紼 (松竹梅と鶴の丸)



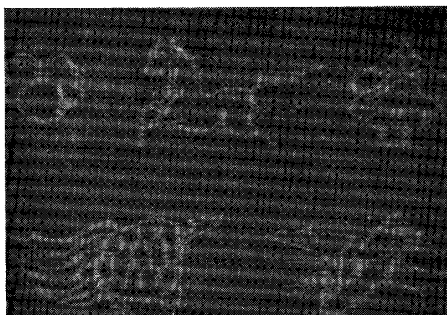
㉔ 広瀬 紼 (縞に鶴)



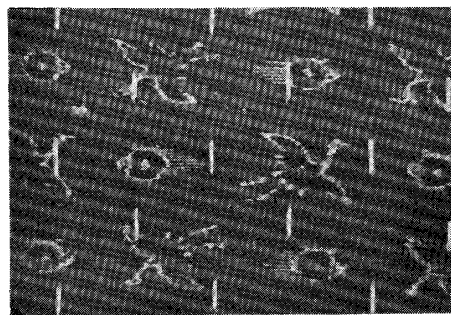
㉕ 浜 紼 (鶴に竹)



㉖ 広瀬 紼 (めでたづくし)



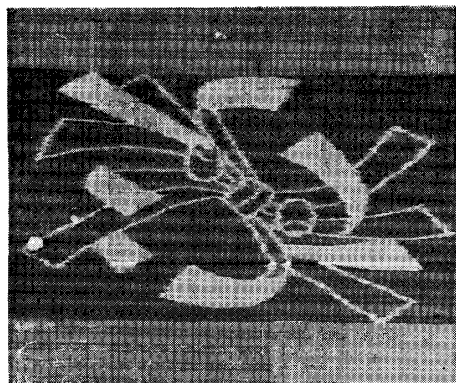
㉗ 広瀬 紼 (亀と鶴)



㉘ 広瀬 紼 (たばね熨斗に宝球)



㉙ 浜 紼 (たばね熨斗)



## VII 結 語

染め織りの仕事は、その時代的性格や、社会的組織、ならびに製作的条件等をはなれて、生まれでたものとは考えられない。ことに紆織りは、日常生活と密接な関係があつて、その地方の材料や、技術や、生活的条件などを全然無視して考えることはできない。あの美しい紆は山陰の気候や風土的条件に合わせて、農仕事の片手間に、染め、織られて、毎日着られ、洗濯されてさらに磨かれたものである。

浜紆が大量に生産され、技術的にも急速な発展をしたのには、浜地方が社会的組織や、製作的条件に恵まれていたことがあげられる。弓が浜と広瀬は直線距離では4里あまりで、古くから交流がはげしく、紆の手法をはじめ、浜の目紆、縹綿、種糸等は弓が浜から広瀬にはいった。

また広瀬では紺屋で種糸を取り扱ってはいたものの、それはあまり使用されなかった。それに対して、浜紆では種糸をさかんに用いた。これは浜地方の生活条件によくあった方法であると思われる。

出雲地方には紆のほか、筒描きや、型染めの手法があり、いずれも主として藍が用いられたが、他にあかね、<sup>べにばな</sup>紅花、クリの皮その他の草木も使われた。

しかし、紆染めの特色は、他の染料とちがって、紆染めの部分が非常に強く、洗っているうちに白地がきれても紆染めの部分は破れないことや、色調が洗いさらすほどさえてくることなどが挙げられる。時代がさがるにつれ「ごぞめ」といって、黒で着色しておいて、そのうえに藍をかけ、そめる回数を少なくしたものもできたが、藍色に黒みがかかってほんとうの紆の深い色でなく、糸にしみついた黒い膜のためか紆がはげやすといわれている。また、藍染めは染めの回数によって、つぎのように色別けができる。すなわち、浅葱、<sup>さ</sup>空色、花色、<sup>なんど</sup>納戸、<sup>なみ</sup>並紺、中紺、濃紺などがそれで、糸を染めにやるときは、色の注文をしていたものである。

末幕から明治のはじめにかけて青春時代をすごした老女たちの話しによると、<sup>み</sup>実綿を自作するか、または買い入れたものを、みずから打つか、打ってもらかして、その縹綿を<sup>よなべ</sup>夜業仕事に糸車でひくのが女の役目であったということであるが、木綿一反は<sup>かせ</sup>縹糸180匁(675g)を要し、<sup>しょうず</sup>上手な人でも一晚20匁(75g)というから、一反分の糸を挽くのには十夜ちかくを必要としたわけである。

むかしは機をおる家では縹帳や紆帳を作っていて、あるときはそれを模倣したり、また新しい柄を補ったりして楽しんだものである。綿打ちから織りあげるまでの仕事のなかで、どうしても人手にまかせねばならぬのは、紺屋に依頼して染めてもらうことだけであった。あとはただ、余暇をみつめてこつこつと、織り仕事に精だしたものである。

紺屋にはいろいろな専門があつて、<sup>ちりがせ</sup>散紆紺屋、仕入れ紺屋、無地紺屋、型付紺屋、<sup>はんてん</sup>かんばん紺屋、<sup>のほり</sup>紆天紺屋、<sup>ぬぐい</sup>幟紺屋、手拭紺屋などとそれぞれよばれていた。そして広瀬や弓が浜のような紆染めをするのを、ただの「紺屋」といった。

浜紆と広瀬紆とに共通な点は、むかしの模様のほとんどが、十字、井桁、矢紆が基本となっ

ていることである。なかには大柄な絵模様を表現した、いわゆる絵絣もあり一時盛んであったが、今日では新しく製作もされないし、その需要も少なく、ほとんどみることはできない。それは絣というものが、その技法の性質上、絵模様よりも、幾何学的模様こそ、その効果と味が発揮されるもので、たとえば、大島絣の花模様が、こまかな十字絣の連続で表わされているのなどは、それを如実に物語<sup>によ</sup>っていると思われる。その意味において、浜絣や広瀬絣は原型的手法のものが最も純粋な美しさをもっており、これまでの仕事をふりかえてみると、括くり絣はこの地方の生活文化を培ってくれた貴重なものであることを深く感じ、これらの手法を今のうちに若い人たちが受けつぎ、育成しなければならぬことを痛感している。

この研究を行なうにあたり、鳥取県立米子東高等学校の松尾陽吉先生、ならびに大山町所子の村穂久美雄先生のご指導をいただきましたことを、ここに記して謝意を表します。

(S.39.10.30 受理)

#### 参 考 文 献

- 1) 藤原モトヨ：鳥根女子短期大学紀要
- 1, 昭和37年
- 2) 同上：同上 2, 昭和38年 藤原モトヨ：鳥根
- 3) 米子市史 (1928)
- 4) 鳥取県郷土史 (1920)
- 5) 鳥取県産業案内 (1912)
- 6) 鳥取県勸業沿革 (1900)
- 7) 鳥取県の綿業 (1927)
- 8) 西伯郡における綿作経済調査 (1927)
- 9) 吉田たすく：倉吉絣おぼえ (1948)
- 10) 山辺知行：染織 (1965)
- 11) 三木与吉：阿波藍譜 (1963)
- 12) 富山薫：日本の絣 (1964)
- 13) 三瓶孝子：染織の歴史 (1962)